

## “ライブラリー・カレッジ”の現代的意義

著者	村上 泰子
巻	39
号	2
ページ	47-54
発行年	1993-06-30
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10112/6493">http://hdl.handle.net/10112/6493</a>

# “ライブラリー・カレッジ”の現代的意義\*

村上泰子\*\*

1970年代後半以降、アメリカ合衆国の高等教育を取り巻く状況は、教師中心から学生中心の時代への移行、生涯学習の強調という、2つの大きな変化を見せた。そのような流れの中で、大学図書館の在り方についても再考が必要な時期を迎えていた。

本稿では、ルイス・ショアーズの“ライブラリー・カレッジ”を現代という文脈の中に位置づけ、大学および大学図書館の両側面から、“ライブラリー・カレッジ”が従来の問題点を解決しうる要素を含んでおり、技術面の進歩も“ライブラリー・カレッジ”的意義を高めていることを指摘した。それとともに、実現の障害となりうる問題についても取り上げ、解決の方向を探った。

このような理由から、本稿においては、合衆国の大手を研究対象として、現代アメリカの文脈における“ライブラリー・カレッジ”的意義を問い合わせ、その有効性と問題点について検討する。

## 1 はじめに

“ライブラリー・カレッジ”は、ルイス・ショアーズがナッシュビル(Nashville)のジョージ・ピーボディ(George Peabody)大学(1933年、図書館長兼図書館学部長として赴任)において、高等教育学科のシェルトン・フェルプス(Shelton Phelps)博士のもとでの博士論文準備の際にレポートとして提出した“College of Library Arts”の中で初めて構想されたものである。公式に認められている論文としては、1934年のALAモントリオール大会<sup>1)</sup>における発表“The College of Library Arts: a possibility in 1954?”を、翌年のSchool and Society誌に掲載したものが最初と言われている。<sup>2)</sup>

“ライブラリー・カレッジ”は、図書館の立場から将来のカレッジの理想像を描いたものであり、その後Library Literatureにlibrary-college movementという項目が数年間にわたってみられるほど運動として高揚した。ところが現在では“ライブラリー・カレッジ”について触れた論文を目にすることは稀となっている。しかし、現在アメリカ合衆国において進行中の高等教育改革が目指している方向と、“ライブラリー・カレッジ”的描くところにはいくつかの共通点が見いだされ、そのことが大学図書館の立場から見ても、研究支援サービスに比して今までのところ停滞しているように思われる学習支援サービスを発展させる上でひとつの解決策を提供しうる、と考えられる。

## 2 “ライブラリー・カレッジ”

ショアーズの“ライブラリー・カレッジ”に対する取組みは長期にわたるものであり、1934年の発表後、実際に精力的に関わりはじめるまでに約20年の開きがある。また、それが大学図書館界に影響を及ぼしはじめるのは60年代になってからのことであり、この間に高等教育をとりまく状況は大きな変化を見せた。第2次世界大戦後の大学増設によるマス型への移行、スプートニク・ショックを契機とする高等教育の見直しといった流れの中で、“ライブラリー・カレッジ”も具体的な内容や重点のおき方にさまざまな変化を生じた。<sup>3)</sup>

“ライブラリー・カレッジ”的現代的意義について考察するためには、変動の多い具体的な内容をつぶさに検討するよりも、枝葉の変化によらず絶えず強調されてきたいくつかの特徴に焦点をしばり、それらを高等教育の流れの変化という背景のもとでとらえなおすのが最良の方法である、と考える。

ショアーズは“カレッジが図書館であり、図書館がカレッジであるとき、これをライブラリー・カレッジという”と定義している。<sup>4)</sup>この表現は非常に抽象的で、現実のカレッジや図書館を想定して当てはめようとすると、誤解を生じやすい。例えばThe ALA Glossary of Library and Information Scienceは、ライブラリー・カレ

\* 1993年1月16日受理

\*\* むらかみ やすこ 京都大学大学院教育学研究科

ッジをより具体的なことばで，“カレッジの図書館と教育プログラムとを結合させたものであり，支配的な学習様式は，あらゆる種類のメディアを活用し，書誌的エキスパートであるファカルティが導く，図書館中心の自主学習である”と定義している<sup>5)</sup>が，ショアーズは単に図書館と教育プログラムの結合，すなわち教育プログラムの中に図書館利用を組み入れることのみを企図したわけではない。“ライブラリー・カレッジ”はもともと，リベラル・アーツにおける図書館を，自然科学における実験室のように活用しようという発想から生まれており，図書館の資料を随所で有効に利用させるプログラムこそが教育プログラムであって，学習の行われる場にはつねに図書館が存在し，利用されなければならない。教室も図書館もともに自主学習の場であるという点で同一であり，そのような物理的制約を受けない教室と図書館の機能上の融合こそが“ライブラリー・カレッジ”的根幹なのである。

このような考え方の根底には，能力的にも背景的にも多様な学生があり，かれらの個性を尊重すべきであるという前提が存在する。彼らに必要なのは画一的な既成のプログラムではなく，最初の興味や関心およびその変化に合わせてつくられる，オーダーメイドの柔軟なプログラムである。<sup>6)</sup>

ファカルティもまた，従来のように「持てる知識を伝授する」のではなく，学生が主体的な学習を通して単なる情報や体験を知識に高めてゆく過程の中で，適切なときに適切な方法で援助を行う，学習の媒介的な存在である。

自主学習を適切に進める手段として，さまざまなメディアの利用がある。ショアーズはカレッジにおいて学生が獲得する学習内容，すなわちカリキュラム内容をジェネリック・ブック (Generic Book)<sup>7)</sup>ということばで表現している。ジェネリック・ブックとは「人間が行うコミュニケーションのさまざまな可能性の総体」と定義され<sup>8)</sup>，印刷資料にとどまらず，各種形態のメディアを含んでいる点，知識の伝達形態だけでなく知識の内容をも含んだ概念である点，などに特徴がある。人，時，場所などに応じ，これらを組み合せることにより，自主学習が有効なものとなると考えられている。

以上が“ライブラリー・カレッジ”的主たる特徴であり，集約すると，(1)教室と図書館の機能の融合，(2)多様な学生の個性の尊重，(3)自主学習，(4)多種メディアの活用，となる。

### 3 “ライブラリー・カレッジ”的現代的意義

#### 3.1 高等教育の変化と“ライブラリー・カレッジ”

1970年代後半以降，アメリカの高等教育は，“学生募集難”という危機に直面した。これは，“該当年齢人口の減少<sup>9)</sup>，学費の高騰，大学進学による兵役免除の特権の廃止，大学進学を奨励する政府の学生援助資金の削減など”の外的な力と，“大学教育が学生個人にとって割の合わない消費にすぎないとみる風潮がひろまってきた”という内的な力とによるものであった。<sup>10)</sup>正規学生の減少という事態は，高等教育に，次に挙げるような変化をもたらした。

##### (1) 教師中心から学生中心へ

正規学生数の減少によって，“これまで入学を嘆願する立場にあった学生が，今ではお客様扱いを受ける”<sup>11)</sup>時代へと移り変わっていた。学生は“教育というサービスを買いにくる消費者であり，大学教育を通して自分を社会に高く売り込むことが出来るような付加価値を得ることを，要求する”<sup>12)</sup>ようになる。このような時代をリースマンは student consumerism の時代と呼んだ。

主導権が学生に移ったのと同時に，カレッジ側が学生の嗜好，とりわけ社会に出たときすぐに役立ちそうな学問を学びたがるという学生の要求にはほとんど無条件に反応し，多くのプログラムを順次追加していく結果，学生はかえって主体性を失い，与えられる数多くのメニューの中から気に入ったもの，楽しそうなもの，効率のよいものをつまみぐいするだけの受動的な存在になってしまいうといふ問題点が顕在化してきた。<sup>13)</sup>

##### (2) 生涯学習の時代へ

正規学生数の減少に対応して，各高等教育機関は，それ以前から増加傾向の見られた成人学生，外国人学生など多様な学生の受け入れに積極的な姿勢を示しはじめた。中でも30歳以上の入学者数は，1970年代の法的整備<sup>14)</sup>を背景に70年には130万人程度であったのが，80年には2倍の約260万人，85年には約310万人と，年々増加傾向にあり，95年には350万人を越えるとの予測がなされている。<sup>15)</sup>まさに，“成人学生はアメリカ高等教育の《救世主》となった”<sup>16)</sup>のである。それとともに，それまで，コミュニティ・カレッジなどの一部の限られた教育機関の問題であった成人学生の問題は，より広い範囲の問題となり，生涯学習の時代における高等教育の果たすべき役割について，よりいっそう真剣に考える必要が高まってきた。

ユネスコ・ナイロビ会議において採択された「成人教育の発展に関する勧告」<sup>17)</sup>の中で強調されているよう

に、このような成人学生の学習に重要であるのは、学習者を中心にして考えるということである。“学習者は、単に教育を受ける消極的な対象であるだけでなく、学習過程の積極的な促進者であり企画者でなければならぬ”<sup>18)</sup>というのが、成人教育の基本的な考え方である。

70年代後半以降、高等教育にもたらされた以上二つの変化はいずれも、「学習者が中心となって行う自主的な学習への取組みが重要であること」を示唆するものであった。

以上のように現代におけるアメリカ高等教育界の特徴は、学生中心への移行と、生涯学習時代への移行であった。このような時代に“ライブラリー・カレッジ”はいかなる意味を持つのであろうか。

教師中心の時代には、ある意味で教師の手間を省くための手段であった自主学習も、学生中心の時代においては、そのような放任主義的なものではなく、学生の自主学習を教師が注意深く援助するものでなければならない。それは教師の手間を増やすものとなる。しかし今必要とされているのはそのようなカレッジである。“ライブラリー・カレッジ”は、図書館と教室を融合させるという方法によってこのようなカレッジを実現しようとするものである。

例えばリースマン自身が先に触れた student consumerism の時代の問題に対抗するものとして高い評価を与えている2つのカレッジ——カリフォルニア大学サンタ・クルス校とエンパイア・ステート・カレッジ——を見ても、そこに“ライブラリー・カレッジ”的特徴が不完全ながらも組み入れられていることが分かる。

サンタ・クルス校は、64年にフロリダ州ワクラで開催されたワクラ・コロキアム (Wakulla Colloquium)において革新の試みを提案した実験大学11校の内のひとつであったが、ショアーズはこのコロキアムを計画したひとりであり、会議後も、“ライブラリー・カレッジ”が合衆国堕落したキャンパス風土の救いたりうるとの確信を得たと語っている<sup>19)</sup>ことから、サンタ・クルス校の試みには“ライブラリー・カレッジ”的要素が含まれていたと考えられる。

サンタ・クルス校の特徴は、寄宿制カレッジの制度をとり、小規模カレッジ多数から構成される点にある。図書館との関係については、容易にかつ正確に読書する能力と幅広い読書欲を持った学生を養成することをひとつの方針とし、図書館長が教育計画作成部長と並ぶポジションにある点も特徴である。<sup>20)</sup>図書館の機能が教育の機能と融合するという段階には至っていないが、小規模カレッジ群という組織上の特徴や、個人指導、自主研究

の重視という教育上の特徴に“ライブラリー・カレッジ”的要素が見られる。

エンパイア・ステート・カレッジは、英国のオープン・ユニバーシティのモデルに最も近いとして評価されている、ニューヨーク州立大学のうちの1校で、最近の資料になるが、40以上の学習センターのネットワークを通して機能し、各センターはまた、各地域の、学生個々のプログラムを組み立てるのに役立つ資源のクリアリングハウスとなっている。学生は、そのセンターにおいてファカルティの指導者に会い、議論したり、個人個人の学習プランを立てたりすることができる。“ライブラリー・カレッジ”でいうところの処方箋方式である。学生の平均年齢も37歳と、成人学生の多さを示している。<sup>21)</sup>

さらに近年、成人学生や外国人学生などの非伝統的な学生がカレッジに進出する割合がますます高まっているが、かれらは一般に学習意欲が高く、目的も明確である場合が多い。かれらこそ生産者としての学生に最も生まれ変わりやすい位置にあるのだが、その一方で、かれらは働きながら学習する必要があったり、家庭に拘束される時間が長かったりと、時間的・場所的ハンディキャップをより多く背負っている。各種メディアを統合して学生の多様性に対応し、時間的・場所的制約からの解放を目指した“ライブラリー・カレッジ”的プランは、現代の高等教育におけるその有効性を以前にまして高めている、と言えるだろう。

### 3.2 大学図書館の問題点と“ライブラリー・カレッジ”

学部学生への直接サービスとして大学図書館が現在行なっているのは、個人を対象とするレファレンス・サービスと集団を対象とする利用指導であるが、大学教育の一環として行われるサービスという観点から見た場合、そのいずれもが不十分なものとなっている。

レファレンス・サービスに関して言えば、その不十分さは「研究援助」の方向で発展してきたことに由来する。研究援助の場合には、求めに応じて情報を直接提供することが可能であり、サービスの範囲や方針が明確である。

一方学部学生に対するレファレンス・サービスの場合には学生の抱えている問題意識に深く踏み込んだサービスが必要とされるが、ウィルキンソンが学習図書館を対象として行なった調査では、そのようなサービスはあまり行われていなかった。<sup>22)</sup>このような現象が生じた原因としては、時間的制約以外に次のような点が指摘されている。

- (1) 学生が教室で与えられる指定図書の課題をこなすのに精一杯で、自主的に問題意識を持ちそれに取り

組むだけの余裕がない。<sup>23)</sup>

(2) 図書館員と教師との間でカリキュラム等に関する連絡がとられていない。<sup>24)</sup>

(3) 学生は回答を性急に要求しがちであり、教育的指導に対しても背に向けることが多い。<sup>25)</sup>

さらに、

(4) 学生は開架の図書を自分で適当に選ぶほうが、図書館員の指導で一から取り組むよりも手っとり早いと考えている。

(5) 図書館員は個々の学生についての知識をほとんど持っていない。

などの理由も考えられる。

これらのうち、(1)は学生と教師との関係からくるものであるが、それ以外は、学生と図書館あるいは教師と図書館、すなわち教室と図書館との関係からくるものである。(3)や(4)を例にとれば、これらは図書館資料の利用過程が評価対象とならず、レポートなどの結果のみが対象とされるところから生じている、と考えられる。結果に経過は反映されるものであるから、それでよしとする考え方もあるが、たとえそうであるとしても、過程に関する評価が学生にフィードバックされなければ、その意義が十分に理解されず、結局は過程が評価されていないのと同じことになるであろう。図書館の利用の重要性がいくら主張されても、利用過程に教師が関知しない限り、結局大学図書館は教育の場から置き去りにされる。

カツのようにレファレンス・サービスと利用指導とを区別して、レファレンス・サービスにおいては情報を直接提供するべきではないかとの考えもある<sup>26)</sup>が、少なくとも学生に関する限り、そのサービスは教育との連携によって行われなければならないだろう。教室では、学生の個別の興味や関心、学習の深度などに無関心に課題を与え、図書館では、学生に関する知識はもちろん、課題に関する知識も持たないままに、学生自身の思いつきによる場当たり的な要求に応じるというのでは、カレッジ全体としての教育の一貫性が保たれず、結局は教室で行われる活動の妨げにもなる。レファレンス・サービスも利用指導と同様、やはり教育の一環としてとらえられるべきであり、教育の場からはなれたものであってはならない。

他方、学部学生に対する援助の多くは利用指導(instruction in library use)の名の下に行われてきたが、集団を対象とした1年に1度程度の単発的なものであっては、効率はよくとも、学生の個性に対応することは不可能に近く、その意義が理解されない場合も多い。

利用指導の目的を、利用者個々人が継続的自己教育を通して、そのトータルなパーソナリティを成熟へと導く

のを助けることであるとし、その実現は利用者—図書館員間のコミュニケーションを通してなされるとの立場から、利用指導、レファレンス・サービス、読書指導などを総合的にとらえ、そこで生じるコミュニケーション・プロセスに関する研究を進める動きは、今までにも見られた。<sup>27)</sup>しかし、このような指導は教育全般と深い関わりを持つものである。これまでのよう、図書館と教室とを別個の存在とする前提に基づく限り、上記のような利用指導の目的は実現し得ない。また、密接に関係した仕事を別々に行なうことは資源の無駄でもある。

このようにレファレンス・サービス、利用指導の両面とともに、教室と図書館との乖離関係が大きな問題点となっている。

ボイラーは図書館に関する提言の中、“質の高い大学には、広い意味での多種多様な学習資源というものが存在し、それらが教室の教育をより豊かに発展させ、学生を独力で勉強できる学習者にしていくものである”と前置きした上で、現在の大学図書館がいかに軽視されているかという現状、半世紀前に指摘されていた教室と図書館とのギャップの問題が現在でも存続していることに触れ、さらに次のような提言を行なっている。

多くの大学では、図書館は学内の他の学習施設と関係を持たされていない。コンピューター・センターも孤立したまま運営されている。そして、授業の中で、各施設の学習資源が総合的に利用されることも少ない。したがって、学部課程教育を改善し、学習共同体を確立するためには、相互に連携する関係を作りあげねばならない。そのためには、図書館や教室に技術を導入し、そして最後に大学の教育目標とその技術を関連させていくことが必要だとわれわれは考える。<sup>28)</sup>

“ライブラリー・カレッジ”は教室や図書館を連携させた学習ネットワーク全体をカレッジととらえている点で、大学図書館の学習支援サービスがかかえていた問題の解決を図りうるとともに、現在の高等教育界からのこのような要請にも応えうるものである。

### 3.3 “ライブラリー・カレッジ”を支援する技術

これまで“ライブラリー・カレッジ”は実現可能性の面で疑問視されることが多かった。例えば、“ライブラリー・カレッジ”的特徴のひとつ「学習の個別性」に関連した問題として経費の問題があった。学生1人にハードウェアを備えたキャレルを1台用意するといった計画に対して、非現実的であるという批判が数多くなされている。

しかし現在ではパーソナル・コンピューターの価格は

年々低下し、機能が向上するにつれて普及率が高まっている。1972年の調査では在学中の4.5%の者しかコンピューター教育を受けていなかったのが、76年には約3分の1が大学のコンピューター施設を利用し、84年には約半数がこれを利用しているという結果が得られており、大学でますます多くのマイクロコンピューターが購入され、学生に教科書だけでなくパーソナル・コンピューターの購入を指示している大学さえ存在し、コンピューターの購入に資金援助をする大学も約3分の2あるという普及状況<sup>29)</sup>は、従来の批判をますます当たらなくするであろう。

個々の学生の興味や関心にあわせて、それぞれにシラバスを作成する方法に関して、手作業では膨大な時間と経費を要するであろうが、情報検索のシステムを応用して、そのカレッジでその時点において活用可能な資源の主題分野や特徴をデータとしてコンピューターにインプットしておき、学生のプロファイルと突き合わせるというような方法を用いれば、実現可能性は高まるだろうと思われる。

またカレッジの規模に関しても、ショアーズは“ライブラリー・カレッジ”的個別学習を実現するためには学生数は500~1,000人が適当であるとしていた<sup>30)</sup>が、このような規模では経営が成り立たないという点での批判が多かった。現在、コンピューターが普及し、通信技術の発達によるネットワーク構築が容易になってきていることにより、学習場所の分散が可能である。成人学生の集まりやすい場所にサテライト・キャンパスをつくったカレッジの例や、放送大学の試みなどは分散化へのワンステップととらえることができよう。“膨大な知識の蓄積は、伝統的手法および新たな科学技術を駆使してキャンパスから離れたところにいる受講希望者にも教育を提供する方法を大学は考えるべきことを示唆している。…大学は科学技術を使って、学生のニーズを理解し、そして、自宅や職場で個別学習および自習のプログラムをとおして教育を展開することができる。”との指摘<sup>31)</sup>もあるように、今後ますます学習の場の分散が進むであろう。そうなれば1カ所に人を集めることを念頭に置いた従来の規模の論議は再考が必要となろう。

近年の技術の発達は、学習ネットワークの構築を促すという点で、“ライブラリー・カレッジ”的実現へのワンステップを支援するものと考えられる。

#### 4 “ライブラリー・カレッジ”的問題点

“ライブラリー・カレッジ”が実現可能性という点で抱えている問題を技術的な発達が解決へと導くと述べた

が、ここではその他の問題点について考察する。

##### (1) 情報技術の学習への導入に伴う問題

“ライブラリー・カレッジ”では、個人の自主学習が重視され、それをサポートするために多様なメディアがコンピューターを通して提供されることになる。しばしば批判されてきたのは、教育機器の導入が学生の創造的思考をかえって妨げるという点である。たしかに教育機器への全面的な依存は、批判精神の欠如につながるかも知れない。コンピューターからの出力を、疑問を差しさむことなく受け入れては、主体的な学習者とはなり得ない。しかし、“ライブラリー・カレッジ”においては必ずしも教育機器に全てを委ねているわけではない。むしろ、媒介としてのファカルティの存在を非常に重視している。

現代は情報過剰の時代といわれ、個人が処理しきれないほど大量の情報が今後コンピューターを通して提供される確率はますます高まっている。このような時代に、人間がより主体的に生きるためにには、それらの情報の中から真に必要なものを選びとる力をつけなければならない。情報を一方的にただ送り出すのではなく、情報獲得のプロセスを絶えずチェックして、使用者にフィードバックすることにより、教育機器の導入は効果的なものとなる。

##### (2) 学習の場の分散に伴う問題

成人学生が職場や家庭にいながらにして学習できるということは、逆にいえば、その分他の学生や教師とにかく接する機会が失われるということである。ボイラーも言うように、われわれは個人として生きている一方で、他者との深い相互依存関係の中にいる。<sup>32)</sup>人間のこの「社会性」を認識させてくれる場所として大学は重要な役割を果たす。例えば、一般学生は成人学生とともに学ぶことによって問題意識を芽生えさせる機会を得、成人学生は、自分の問題意識を議論によって明確化していく機会を得ることができる。外国人学生と一般学生との対話は、多様な文化が存在することを身をもって体験させてくれる。そのような機会が奪われるのであれば、“ライブラリー・カレッジ”的意義は半減するであろう。したがって個別学習による学生の思考が、他者との議論の場に持ち込まれることによって、修正され発展させられるような仕組みを組み込むことが必要である。電子掲示板上での意見交換を促すのもひとつ的方法であろう。

また“ライブラリー・カレッジ”は図書館を自然科学における実験室のように活用しようという発想から生まれたものであるが、いまや実験室は図書館だけでなく、職場、家庭、地域などあらゆる場所に見いだされるようになった。学習の場の分散によって、学生はそれぞれの

関心に最も適合した実験室に身を置き、その場にいながらにして学習し、学習結果を現場にフィードバックすることができる。この利点は、先のマイナス面を補って余りある、とわたしは考える。大学は、社会性を認識させてくれる唯一の場所ではなく、多数の場所のひとつに過ぎない。これまで大学という場所に拘束されることによって奪われていた、その他の場所での交流が促進されると考えるならば、大学における議論の場の減少は、ごく限られた範囲の問題となるであろう。

### (3) 組織と人の問題

“ライブラリー・カレッジ”において、教室と図書館との機能面での融合を図る上で、中心的役割を担うのは、教師も図書館員も含めた意味でのファカルティである。現在全く別の組織に属するこの学習援助者たちの密接な協力関係なしには、“ライブラリー・カレッジ”的実現はありえないだろう。

ナップはモンティース・カレッジにおいて“ライブラリー・カレッジ”的線に沿った試みを展開したが、ファカルティと図書館員の関係に焦点を当てたバイロット・プロジェクト段階の、カリキュラムに関する意思決定途上で以下のような問題が生じたと報告している。

- 1 図書館員は、ファカルティの地位を得ているものであっても、最初はなかなか意思決定に参加させてもらえない。
- 2 ファカルティの中でも有力な3~4人のひとたちが非公式の場で意思決定をし、公式のミーティングの場ではその意見が公表されるだけ、という場合があり、そのような場合には概して図書館員の立場での意見は無視される。
- 3 プロジェクトに参加する図書館員は、図書館員の組織の中での自分の立場が見えなくなり、不安に陥りやすい。<sup>33)</sup>

ナップは、このような問題が生じる原因のひとつは、図書館が官僚制組織である一方で、ファカルティが仲間集団であるという組織上のギャップにある、と分析している。この問題に対してナップのとった方法は、図書館員との協力関係に対して比較的柔軟な考えをもつファカルティとの接触からはじめて、段階的に開拓していく方法であった。この方法はある程度の成果をもたらしたが、現在の組織内での解決方法である以上、限界がある。

この問題に対するひとつの方法として考えられるのは、ファカルティとともに働く図書館員を従来の図書館の組織から切り離すことである。ランカスターは、未来の図書館員が図書館外で人々とより身近に接しながら仕事をする姿を望ましい姿と考え、学術、医療、産業、その他全ての場所で、研究チームの対等メンバーとして働き、学

術部門と直接連携するような図書館員のあり方の必要性を強調した<sup>34)</sup>が、教育面でも同様に、ファカルティと直結したメンバーを図書館の組織と切り離して再編成する方法が考えられるのではないだろうか。

### (4) モチベーションの問題

自主学習を特徴とする“ライブラリー・カレッジ”において学習が有効に進められるためには、学生側に強い学習動機が必要である。このモチベーションは明確な目的から生まれてくる。明確な目的を持った学習、問題意識を明らかにした学習こそが自主学習の根本である。問題意識は個々の経験の中から発してくるものである；という点からいって、非伝統型の学生は比較的モチベーションが高い。成人学生であれば、職場や家庭などで得られた経験から、つねに疑問に思ってきたことや解決しなければならないことなどを問題意識として抱えているであろう。マイノリティの学生であれば、社会における差別を克服したいという意欲を強く持っているであろう。外国人学生であれば、国際比較の観点から問題意識が芽生えているかもしれない。これらの学生をターゲットとしたアプローチは、他の学生のモチベーションを高める上でも重要である。

またアメリカの高等教育においては、非伝統型の学生の問題は主としてコミュニティ・カレッジなど、ほとんど無選抜に近い小規模校の問題として取り扱われることが多かったが、それがより広い範囲の問題となった現在、正規の学生にもモチベーションの高い学生を多く抱えるハーバード大学やMITといった選抜度の高い大規模校に、“ライブラリー・カレッジ”的実現可能性が高いといえるのではないだろうか。

### 5 おわりに

以上、現在のアメリカ高等教育の流れの中に“ライブラリー・カレッジ”を位置づけ、その意義と可能性を検討してきた。“ライブラリー・カレッジ”的理論としての重要性は以前から指摘されてきたところであるが、今日の技術的発達とカレッジをとりまく環境の変化によって、理論としてだけではなく、実現性の点からもその重要性は高まっている。カレッジの状況が急激な変化を遂げるとは考えられないにしても、変化の方向に向かいつつある現在、大学図書館の教育に果たす役割と位置付けを再考するためには、この“ライブラリー・カレッジ”的さらに多面的な研究が今後必要となってくるであろう。

シフレットは、大学図書館の歴史を総観し、アカデミック・ライブラリアンシップにおける発展のひとつとし

て“ライブラリー・カレッジ”を取り上げ、大学図書館員という専門職を定義するために、それについてもっと調査することが必要であるとの見解を示した。<sup>35)</sup>またディーカルは、ペンシルバニア大学の教員と学生の図書館中心カリキュラムに対する態度を調査した結果から、生涯学習に“ライブラリー・カレッジ”が適していると報告した。<sup>36)</sup>

これ以外にも多様なアプローチがあると考えられるが、今後は特に、現在学習ネットワークが構築されつつある中で、大学図書館の在り方について“ライブラリー・カレッジ”の観点から考えてみることが重要である、と考える。

**付記** 本研究は、日本図書館学会の1991年度研究費助成金を受けて行なった。紙面を借りて、ここに謝意を表する。

#### 〈注〉

- 1) ショアーズはシカゴ大会と記憶しているようだが、*ALA Bulletin* の記録を参照すると34年はモントリオール大会となっている。シカゴは前年の開催地であり、シカゴ大会においてシンポジウムに参加し、その席で構想の一部を発表しているので、それと混同したのであろうか。
  - 2) Jordan, Robert “The Term “Library-College”, Genealogy of Idea: Theory, Practice and Publications,” *The Library-College*. Shores, L. et. al. Philadelphia, Drexel Press, 1966, p.xxiii.
  - 3) 例えば学習内容についてみると、初期のリベラル・アーツの重視から、次第に実用教育、職業教育の導入を通して、純粹科学と応用科学の複合へと変容している。
  - 4) Shores, L. “The Library-College Idea.” *Library Journal* no.91, 1966.9.1. p.3871.
  - 5) Young, Heartsill *The ALA Glossary of Library and Information Science*. Chicago, A.L.A., 1983, p.131.
  - 6) ライブラリー・カレッジの学生は入学時、自分の興味・関心分野についてのプロファイルを作成し、それに沿ってファカルティがシラバスを作成する。ショアーズはこれを患者の症状に応じて処方箋を書くホームドクターにたとえている。
  - 7) Shores, L. “Library-College: Prototype for a Universal Higher Education.” *Encyclopedia of Library and Information Science*. Kent, Allen, et. al. eds., vol.14., New York, Marcel Dekker, Inc., 1975, p.475.
- ジェネリック・ブックの例としてショアーズが挙げているのは次のとおり。
- [印刷] 教科書、参考図書、一般図書、雑誌、政府出版物、パンフレット、ペーパーバック、ブロードサイド
  - [図画] 地球儀、絵画、地図、図表、透視画、壁、写真、漫画
  - [オブジェ] モデル、模型、板、標本、遺品
  - [展示] 陳列、黒板、布板、バッグボード、磁石板、電光サイン
  - [資源] 自然、社会、人間、遠足、修学旅行、旅行
  - [投影] オペイク、トランスペアレンシー、スライド、フィルム・ストリップ、映画、マイクロ・フィルム
  - [伝送] ディスク、テープ、ラジオ、録音放送、テレビジョン、キネスコープ、ビデオテープ
  - [プログラム] 印刷、教授機器、コンピューターによる指導
  - [超感觉] テレパシー、透視、予知、精神測定、念力
  - 8) “the sum total of man's communication possibilities”と表現されている。
  - 9) 18歳から24歳までの人口は、*Statistical Abstract of the United States* (Washington D.C.: U.S. Bureau of the Census, 1990)によれば、次のとおり。

1960年	16,128,000人
1970年	24,712,000人
1980年	30,350,000人
1985年	28,749,000人

  - 10) 喜多村和之『高等教育の比較的考察—大学制度と中等後教育のシステム化』玉川大学出版部, 1986, p.183-184.
  - 11) Riesman, David 「高等教育論—学生消費者主義の時代の大学ー」 *On Higher Education. The Academic Enterprise in an Era of Rising Student Consumerism*. 喜多村和之他訳 玉川大学出版部, 1986, p.22.
  - 12) 喜多村和之『大学淘汰の時代』 中公新書 1990, p.179.
  - 13) リースマンは、この問題に関して次のように警告している。
- 教育資格の買い手と売り手のなれあいの舞台を離れて、学生を教育サービスを買う消費者として考え直すと、安易にあるいは単純に学生を消

費者とみなすことが歪曲あることに気づく。学生は、彼等自身の教育的発達における消費者であり生産者でもある。すなわち教育的発達の主要な目的のひとつは、学生をより積極的なそして、少しでも消極的でなく、たんに受容するだけの消費者にならないようにすることである。

Riesman 前掲書 p.229.

- 14) 1972年教育修正法(PL92-318) Title I 高等教育 Subpart4「中等後教育のレベルにおける非伝統的教育の役割の強調」が、1976年教育修正法(PL94-482) Title I 高等教育 Part B「生涯学習」(Mondale Act)に受け継がれ、高等教育における成人学生の学習の支援が強化された。
- Peterson, Richard E. et. al. *Lifelong Learning in America*. San Francisco, Jossey-Bass Publishers, 1980, p.283.
- 15) U.S. Bureau of the Census, *Statistical Abstract of the United States*, 1990, p.151.
- 16) 喜多村『大学淘汰の時代』p.102.
- 17) 平塚益徳監修『増補改訂世界教育事典 資料編』ぎょうせい、1980, p.63-72.
- 18) 新井郁夫『教育学大全集8 学習社会論』第一法規、1982, p.38.
- 19) Shores, Louis *Quiet World: A Librarian's Crusade for Destiny. The Professional Autobiography of Louis Shores*. Hamden, Connecticut, Linnet Books, 1975, p.207-209.
- 20) 文部省『欧米における大学改革Ⅰ アメリカ合衆国』1969, p.82-87.
- 21) Barron's *Profiles of American Colleges*. 16th ed., Barron's Educational Series Inc., p.810.
- 22) Wilkinson, Billy R. *Reference Service for Undergraduate Students: Four Case Studies*. Metuchen, N.J., The Scarecrow Press, Inc., 1972.
- 23) Wilkinson, *Ibid.* p.94-95.
- 24) Wilkinson, *Ibid.* p.339.
- 25) Rothstein, S. "An Unfinished History: A Develop-

mental Analysis of Reference Services in American Academic Libraries." *Proceedings of International Symposium on Academic Librarianship in the Computer Age: Use of Library Resources*. Kyoto, March, 23-25, 1987, p.13-14.

- 26) Katz, William A. *Introduction to Reference Work* vol.2. 1st ed. New York, McGraw-Hill, Inc., 1969, p.151.
- 27) Penland, Patrick K. "Instruction in Library Use." *Encyclopedia of Library and Information Science*. vol.16. Kent, Allen, et. al. eds. New York, Marcel Dekker, Inc., 1975, p.113-147.
- 28) Boyer, Ernest L. 『アメリカの大学・カレッジ』 College: the undergraduate experience in America. 喜多村和之訳、リクルート出版、1988, p.197.
- 29) Boyer, 同上書, p.193.
- 30) Shores "Library-College" p.474.
- 31) Bok, Derek Curtis 『ハーバード大学の戦略』 Higher Learning. 小原芳明監訳、玉川大学出版部、1986, p.183-184.
- 32) Boyer, 前掲書, p.91-94.
- 33) Knapp, Patricia B. "The Methodology and Results of the Monteith Pilot Project." *Library Trends*. vol.13, no.1, 1964, p.84-102.
- 34) Lancaster, F.W. 『紙からエレクトロニクスへ 図書館・本の行方』田屋裕之訳、紀伊国屋書店、1987, p.205.
- 35) Shiflett, Orvin Lee *Origins of American Academic Librarianship*. Norwood, New Jersey, Ablex Publishing Corporation, 1981, p.277.
- 36) Deekle, Peter V. "The Academic Library and the Liberal Arts Education of Young Adults: Reviewing the Relevance of the Library-College in the 1980s." *Advances in Library Administration and Organization*, vol.8. Greenwich, Connecticut, JAI PRESS INC. 1989, p.145-169.